



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（人間文化）
報告番号	甲第1543号
学位記番号	第23号
氏名	柴田 憲良
授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位論文の題名	日本初期天台宗における中国仏教の受容と展開 On the Reception and Development of Chinese Buddhism in the Early Japanese Tendai school
論文審査担当者	主査： 吉田 一彦 副査： 山田 敦, バスキンド ジェームズ

第1号様式

日本初期天台宗における中国仏教の受容と展開

【要旨】

平成二十七年度 博士論文

提出日 平成二十七年十一月十八日

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
人間文化専攻

指導教員 吉田一彦 先生

学籍番号 一二四八〇二

氏名 柴田憲良

要 旨

本研究は、最澄の大乘戒独立運動に関連する諸思想について、中国仏教およびインド仏教の諸様相からの影響関係を検討するとともに、仏教思想史、歴史、教学、美術史など諸分野の研究成果を踏まえ、多角的な視点からの考察を試みた。

第一部においては、最澄と不空の文殊上座制に関わる思想について、その共通点と相違点を明確にすることで、最澄の文殊上座制提唱の意図を解明する。

第一章では、不空が提唱する文殊上座制の理由について検討した。不空が提唱した文殊上座制は、賓頭盧の上座に文殊菩薩をまつる制度である。私は、この設置形態が北周武帝による廃仏の表明文の一節を遠因としたものではないかと考え、不空の皇帝観について考察した。不空の住持した大興善寺の前身は、北周の廃仏後、隋の復仏にあたって一時的に設置された菩薩僧が住む陟岵寺であった。そこから、不空は北周の廃仏と隋の復仏に関する知識をもっていたと考えられる。不空は、自らの時代、廃仏を回避しようとしていたと積極的に皇帝に仏法興隆を付嘱して、「大乘」に基づく国家統治を勧めていった。その上で、不空が宣揚する「大乘」の内実について、国家の息災と国王の守護という護国思想の観点から考察した。

第二章では、不空の文殊上座の設置形態と文殊像の像様を検討して、それと最澄の文殊上座の設置形態と文殊像の像様について比較検討を行った。また、中国における聖僧供養の原初形態、その後の中国における展開、そして日本への導入と展開について検討して、最澄の文殊上座制の主張の理由について考究した。不空の文殊上座は、賓頭盧像の上座に菩薩形の六字文殊像を併置したと考えられているのに対して、最澄の文殊上座は、一向大乘寺には文殊像を単体で設置し、一向小乗寺には賓頭盧像を単体で設置して、布薩においては大乘戒と小乗戒を区別して、それぞれの場合に応じて文殊と賓頭盧を上座に安置するという形態であった。最澄の説く文殊像の像様は、僧形である。最澄は、賓頭盧が本来空座の設置であることを根拠として、食堂の上座に安置されてきた僧形像は文殊像であると論じた。しかし、中国では聖僧像は画像・塑像として造形化されて

おり、日本でも最澄以前から聖僧像として造像されていた。ここから、最澄が従前の賓頭盧像をそのまま文殊像であると解釈したため、僧形文殊像が創出されることになったと論じた。さらに、本章では、不空と最澄の文殊菩薩に求める功德の相違について考察すること、最澄の文殊上座制が単受大乘戒に関連して説かれたものであることを解明した。

第三章では、『延喜式』にみられる宮中儀礼と諸国金光明経齋会における聖僧像の有無について検討した。第二章の日本における聖僧供養をさらに詳論したものである。正月最勝王経齋会、春秋二季御読経、御仏名、一代一講仁王会における聖僧は、『延喜式』の表記法から、聖僧の像が安置されず、聖僧の座のみが空座として設置された。こうした聖僧の空座での設置は、中国における聖僧供養の原初形態と一致するものである。一方、八世紀前半の諸国金光明経齋会では、聖僧像が安置されたと推測した。さらに、諸国金光明経齋会で用いられた『合部金光明経』に説かれる聖僧に注目し、『金光明経』翻訳の史的展開を考慮して、真諦訳から聖僧に関する記述がなされると考察した。

次に、第二部においては、最澄における末法観および仏法興隆について、中国仏教文献の検討を通して明らかにした。

第四章では、最澄が大乘に分類した「大乘上座部」と小乗に分類した「上座部」に関して、中国仏教文献に限定せず、可能な範囲でインド及びスリランカの仏教を取り巻く諸様相を検討して、単受大乘戒を主張する最澄が、なぜ小乗の「上座部」と比叡山や天台法華宗を同一視したのかについて考察した。本章では、玄奘『大唐西域記』所載の「大乘上座部」がスリランカの上座部の中でも親大乘派の無畏山寺を中心とした部派であることを明らかにした。最澄は、『大唐西域記』から大乘の「上座部」の存在を学び、「上座部」を小乗国に分類する一方で、純大乘を標榜する比叡山や天台法華宗を「上座部」に相当させる議論を行った。最澄は、釈尊入滅後百年頃起きた根本分裂の最初期に成立した「上座部」こそ、少数派であれ、釈尊の系譜を正統に引く部派だとして、天台法華宗に相当させた。一方、分裂の原因を作った大天を中心に成立した大衆部は、多数派とはいえ、滅法の先兆であるとして南都の僧綱に相当させた。奈良か

ら平安へと遷都して、桓武天皇による奈良仏教の統制が実施され、奈良仏教に変わる仏教が求められる時代の移行期に際して、最澄は日本でも根本分裂が起こり、「上座部」と「大衆部」のように、比叡山を中心とする天台宗と南都の諸宗とに分かれたと認識していた。本章では、主体的に分派活動を行う最澄の思想の特質を明らかにする。

第五章では、中国の北周末隋初に設置された「菩薩僧」に見られる時間観念、および「末法」の世から「仏法興隆」を果たした隋の文帝の仏教思想について考察した。北周の武帝による廃仏政策は、僧侶に「末法」の世の到来を認識させる象徴的事件であった。しかし、「末法」の最中でも「仏法興隆」や「像法再興」を願って活動する「菩薩僧」の存在が見られた。また、僧侶から皇帝に対して「末法」の世から「仏法興隆」を実現させようとする意図が見られ、文帝自身にも「仏法興隆」を果たすという自覚が見られた。宣帝と文帝は、復仏政策の最後に菩薩僧を設置した。菩薩僧は、鬚・髪を剃らず、嚴服・菩薩衣冠を着すという出家僧とは正反対の形姿であった。本章では、終南山で隠棲した法蔵という人物に着目して、彼の思想を検討した。そこで明らかになったのは、文帝が求めた菩薩僧は、山林修行を実践し、持戒清浄で、德行高き僧侶であり、『法華経』に基づく理念が見られることである。また、文帝と僧侶の山林に対する認識を考察し、末法と山林修行の関係について検討した。

第六章では、最澄の末法観の思想的背景について検討した。本章では、『顕戒論』において統一的に使用される「像末」の語義について検討した。最澄が「像末」概念を用いるのは、南都の僧綱の反対によって「回小向大式」が未実施となっていることに対する批判であった。最澄は、天台法華宗の菩薩僧は、「像末」から「仏法中興」をなしとげることが可能だと主張した。これは正法↓像法↓末法と、順に衰退していく時間観念ではなく、一度「末法」の世が訪れたとしても、「像法」や「正法」の世に戻すことができるとする時間観念である。私は、そうした時間観念が、北周末隋初の「菩薩僧」に見られる時間観念と同一のものではないかと考え、両者を比較、検討した。また、インドの初期大乘經典には、大乘仏教徒が小乗仏教徒に対して「法滅」の状態に陥っていると批難する部分が見られ、

また吉蔵には部派分裂によって異部が生じた段階を「像法」と捉え、大乘仏教を「正法」と捉える思想が見られる。こうした初期の法滅思想やその後展開された末法思想には、本来的に批判対象が設定されており、自己を正当化する際に「正法」が回復されるとする論理が内包されている。最澄は、末法思想に内包される時間観念を活用して、南都の僧綱が支配する仏教界を「像末」の現れだと批判し、単受大乘菩薩戒による完全な大乘仏教を実現することが、「正法」の回復につながるとする思想を提唱した。

第七章では、最澄が南都の僧綱の存在を「末法」の表れであるとしたこと、および「正法」の回復に何を必要と考えたかについて検討した。最澄は、南都の僧綱による僧侶の統制と、僧籍の編成による僧侶の管理が行われている現在を、『仁王経』に説かれる「末法」の世だとし、両制度の廃止を訴えた。現在が「末法」だから、天台法華宗の菩薩僧に比叡山での山修山学を課すとする論理は、北周末隋初の菩薩僧にも共通するものであった。そして、最澄が「末法」と比叡山を結びつけたのは、聖徳太子の慧思後身説と靈山同聴説を教理的な根拠とするものと論じた。最澄は、比叡山を靈鷲山に見立てて、比叡山で釈尊が『法華経』を説法している現在が「正法」の世だとする思想を説いた。そうした「正法」の世を実現するには、得度授戒制度の改正が必要である。最澄は、『法華経』「安樂行品」に説かれるように、小乗の声聞に近づくことなく、比叡山において一貫して出家得度、授戒、山修山学が行えるように朝廷に制度改正を求めた。最澄は、得度の実施日を桓武天皇国忌日に設定したが、その理念的根拠は、桓武天皇が『法華経』と天台教学の興隆を付嘱された天皇であり、崩御後には「像末」の世が訪れたという理解に立つものであった。最澄は、『梵網経』と『仁王経』が「末法」の世を説く經典であることから、この両説を南都の僧綱を批判する目的で用いていた。さらに、『梵網経』をはじめとする菩薩戒の受戒作法には、釈迦牟尼仏から戒を直接受ける自誓受戒のことが説かれており、これは比叡山に『法華経』を説く釈尊を現出させるとする考えと共通する思想に立っていることを明らかにした。